

比庵佳境の会



ほどこきたる帯のごとくにうねる田の
菖蒲の花を見るところかも 比庵九十二

玉堂画伯と比庵先生

窓日短歌会元同人 村上廣元



四十年前の七月、川崎市での窓日の歌会に出席した。出席者約五十名、うち四十名近くが女性で細の和服に夏帯姿が数名いた。

冒頭に、比庵歌一首、水清き川のがれて山高し 日は山を出て川をわたるも

を、名手の男性が音吐朗々と、詠じた。私は、その時、歌会への初の出席を素直に喜んだ。四十二才の夏の日の午後のことであった。

出詠歌一首ごとに、会員の感想があれこれ述べられた後、K先生の全体講評がなされた。最後に進行係から、投票による高点歌の発表があった。すると、澄まし込んでいた細の和服の御召物の「華族」(歌族)が、笑いさんざめくのであった。高点歌の作者五名の賞品は、窓日原稿用紙一冊ずつであった。

歌会終了後、私の眼には、真夏の樹木の光と影とが、一際くまやかに映じた。

一 比庵先生の朗詠

帰りの電車では、Sさんが、私の窓日入会を喜び、初対面ながらにこにこ顔だった。人懐こい初老の男性だった。以下問わず語り。

あなたは、三年前の入会だったら、比庵先生主宰の歌会に出席できたのに、惜しいことをした。先生の歌評は、常識的なようでポイントを捉え「成程、そうか」と思わせた。

先生の自詠歌の上手な朗詠によって、しめ括られると、出席者一同は、楽しい雰囲気にも包まれた。和やかで上等の歌会であった。

先生については、女性にもてたことが忘れられない。やせ型で小柄だったが、顔立ちに気品があり、声もあたたかみのあるよい声だった。気さくでユーモアを解する温和な人柄だった。笑っても照れても、魅力を醸した。窓日の全国大会に、岡山からやって来て、「私は、比庵先生に恋をしてしまいました」と大声で告白する才婆ちゃんもいるのだ。ここで彼は、おかしさをこらえ切れないように、両拳を膝に笑った。なお、続けた。「私は、青梅市の川合玉堂美術館近くに引っ越した。そして比庵先生の歌碑に驚いた。山近く水急くしてまのあたり 玉堂先生描きたまふや 清水 比庵が前庭に建てられ、大切にされていた。解説は、画伯の「雅友清水比庵翁」と紹介して、「今良寛といわれた比庵翁は、今日一層の評価を高めている」と称賛していた。解説の背景について、あれこれ教えられた。

二 インタビューを受けて

書家の金田石城氏が、昭和四十七年五月、東京駒込の自宅の比庵先生を訪問した。時に先生は、八十九歳、矍鑠たる老翁だった。石城 玉堂先生は、どうして知られるようになったのですか？



先生と私

多摩川の白瀬のみゆるる山のうへの

若菜の間より黒き蝶とが

画・玉堂 歌・比庵

比庵 玉堂先生は、弟がね、弟はよく絵描きを訪れたりして、絵描きと知合いが多いんですよ。その一人が玉堂先生だったんだが、私の歌を見て非常に感心されてね、そしてまあ推奨せられるものだから、弟もいい気になって、私を玉堂先生のところへ連れていったわけだ。

石城 なるほど。

比庵 それから玉堂先生が自分の歌を見てくれということ、歌を私が見るようになってね。画を教わったことはないんですがね、描いておられるのをそばで見とおったというわけです。

石城 すると何年くらい玉堂先生の歌をご覧になったんですか。

比庵 先生の歌は、先生が死なれるまでですね。(註 約十五年間)

石城 比庵先生からご覧になって玉堂先生の歌にはどんな印象をお持ちですか？

比庵 あの人はいねえ、ずっと私が見て以来私のような歌になって来ましたね。非常に良質な歌でした。

石城 良質な歌ですね。

比庵 まあ普通の絵描きなんかちよつと歌をやる人もあるけれどもとてもかなわんな：玉堂先生には。

このように画伯を称えて、さらに、人から私のものが認められた始めはそこですな。玉堂先生が私の歌がええ、書がええと言うので褒められたものから喜んでやっておったわけですよ、半ばおどけた口調ながら、感謝の念を表しておられる。画伯は、恩人であった。

三 画伯と先生の交遊

昭和十七年十一月五十九歳の先生は、鶴代夫人と永別(心筋梗塞で急死)、見るもあわれに落ち込んでおられたと伝えられる。が、幸いなことに、一か月後の十二月の第一回野

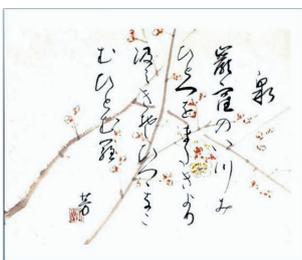
水会展(比庵・三溪兄弟展)に、画伯が賛助作品を出品し、会場に姿を見せ、先生に専門的な助言を：そこで二人の交遊が始まった。それは、歌・書・画の創作をめぐる交際であり、先生は、喜んで創作に没頭するようになって、元気を回復された。

昭和二十二年疎開先の岡山県笠岡町(現在は笠岡市)から東京の新居に越された先生は、令弟三溪とともに、奥多摩青梅の画伯夫妻を、ほぼ十年間に数十回にわたり、訪問された。多摩川の清流のほとりの茅葺きの偶庵には、訪問の都度、雅友四人による和やかな清談の花がほのぼのと咲くのであった。

四 先覚者にして先駆者

昭和三十三年六月、八十三歳で画伯が永眠された。先生は、流麗にして哀切なる挽歌(長歌)を詠じて「にこやかに笑まひたまひてあたたく語りたまひて」と追慕なさった。文化勲章の榮譽に輝く画伯でありながらも、晩年には、自作の画や歌を気軽に知人に配って楽しむ、気さくな老翁であった。

父母のみたまに生きて老いらくの
老ゆるも知らず絵に遊びをり 玉堂
画伯のこんな老境を、先生は、深い敬意を抱いてみておられた。そして、その頃から先



巖窪のいつみひとつをままだきより
汲みきひとつなこむひとつら 芳

(昭和三十年歌会始召人の歌)

ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけ
うぐいすの登山よりきこゆ

昭和四十一年試筆 比庵八十四
(昭和41年歌会始め召人の歌)



追記(清水園)

我家には比庵の娘である私の母が裏打ちして大切に保管していた昭和二十年代の玉堂から比庵にあてた書簡約五十通と、比庵から玉堂にあてた書簡の控えがあり、昨秋岡山市吉備路文学館で「比庵と玉堂展」として二人の合作作品とともに展示された。これらは歌を通して二人の交遊がいかに深かったかを示しているが、同時に玉堂・比庵の高潔な人格・見識を実感させる。

玉堂は無名で八歳年下の比庵を先生と呼んで尊敬しており、祖国が敗戦へ進む中、疎開先からの二人の書簡には戦争賛美の内容は全く無く、国の荒廃を憂い、国民が虚脱から立ち上がるための芸術家の心構えなどが読み取れる。

玉堂永眠の時比庵は笠岡の妹宅に滞在していたが、落胆のあまり帰郷できず、遺族に悼歌(長歌)を送った。その後も挽歌を詠んでいる。

また比庵没後の短歌誌窓日の比庵追悼号に第三溪が次のように書いている。

比庵が死の病で入院する前に玉堂先生の思出話が出て私が「吾々兄弟、先生にはほんとうにお世話になったなあ」と結びと、比庵は大きく領き眼をうるませていた。玉堂先生ご夫妻、比庵夫妻、今は天国に在って歌の話、画の話、そして書についても話は尽きないであろう。先生ご夫妻のご冥福と比庵夫妻の夢もまどけくと祈りつつ筆を擱く。

五 陛下の召人として
昭和三十年正月、画伯は、八十一歳、宮中歌会始の儀において、召人として出席して、御題「泉」を詠進する光榮に浴された。

巖窪のいつみひとつをままだきより汲みきひとつなこむひとつら 川合芳三郎
昭和四十一年正月、八十三歳の先生も召人として出席された。「声」が御題であった。
ほのぼのとむらさきにほふ朝ぼらけ
うぐいすの声山よりきこゆ 清水秀
先生の詠進歌をば、奥多摩における画伯夫妻との水魚の交わりの追憶に重ねて、と解す

るのは、私の行き過ぎである
とされようか。
完

清水比庵さんとの「縁

絵手紙塾阿の会会員

浅田 美知子

人生は出会いで決まると常々思っておりましたとおり、ここ六十路の終盤にて清水固先生に出会い、見せていただいた比庵さんの書画が私を今まで知りえなかった自由で豊かな書画芸術の世界へと導き、そしてそれは人の生き方や筆の持ち方へとつながり、今後、私が進むうえで心の持ち方をも示して下さいました。

そして実は、この固先生との出会いはいくつかの縁が絡み合う天の引き合わせだったことにもやがて気づかされることになりました。

ことの発端は、以前に、日頃グループ展などの写真を撮って下さる浜清隆さんが「近所に清水比庵さんのお孫さんが住んでいる。紹介できますよ。」とおっしゃって下さったことでした。

二〇年前に絵手紙を始めて、いつしか粗画文をかくようになり、小池邦夫先生をはじめ諸先輩のご指導の下で、さらなる筆墨の魅力を訪ねたいと仲間と勉強会を立ち上げてい



大崎ウエストギャラリーでの比庵展



絵手紙塾阿の会の勉強会

比庵さんの作品と絵手紙の実物を別室に展示して見せて下さったことでした。その書、和歌、画が放つ大らかな自由な筆致や色彩は、比庵さんの溢れる心が作品ごとに表れていて、見ている私の胸が高鳴りドキドキ致しました。それは画集で見るととは異なり、光輝く世界でした。

あじぎの片山みちの鳥の聲
竹より松に移り鳴くかも

比庵



た私は、それ以来、固先生から比庵さんのお話を伺いたいとの切なる願いが募り、昨年の初秋に思い切つて浜さんをお願いし清水固先生をご紹介していただきました。

そして十一月、大崎ウエストギャラリーにて、私どもの勉強会、絵手紙塾阿の会主催で清水固先生をお迎えし「比庵と絵手紙」をテーマにした講演会が実現いたしました。満室の受講生の前で、清水比庵さんを語る固先生のお話はユーモアのある温かい息遣いでテンポよく、家族だからこそ、お孫さんならではの魅力溢れるものでした。

竹
昭和28～37年

この講演会は、臨場感溢れるお話と作品の実物を鑑賞できるといふ、他にはない贅沢なものになりました。これをスタートとして、新年明けた二月に大崎ウエストギャラリーが大規模な「比庵展」を開催し、私たち阿の会も、それに乗じてさらなる勉強会「比庵展を視て感じて学ぶ」をさせて頂きました。

この勉強会も実に贅沢で、ギャラリーとお教室を行ったり来たりで、視て感じて自分の筆に落とし込むというものでした。抽選を経て満席のお教室は比庵さんを勉強しようという受講生の熱気が溢れていました。



絵手紙塾阿の会 2017年2月

追記、十数年前に私の大学時代の恩師、アメリカ文学研究者で文人画を嗜む志村正雄先生が比庵さんの書画が大変お好きで、比庵さん宅にもお邪魔したことがあるとおっしゃった時に、私は比庵さんを初めて知りました。以来、筆の自由さと歌の仮名文字が好きで、たまにご本を見て模写をしていた程度の私ですのに、このような新たな素敵な縁をいただいたこと、その中で、実は志村先生と固先生が既にお知り合いであったことが判明したりして、私を取り巻く見えぬ縁の不思議に驚いたり、喜んだりしているところです。

「偶然はなく全て必然」という声が聞こえてきます。



くだものいかりしずかにわが室の
春にたよひ恋の如くに

八十二比庵

比庵さんと母と絵手紙

佳境の会会員

富澤 恒子

あたたくく或は寒く風もふ起
雪もふ里志が梅も咲起け李 比庵七十八
と歌う白梅画二月も早く逃げ、いよいよ「花
紅柳緑」の季節です。晴の国、岡山県は自然
豊かで風光明媚な地、瀬戸内のおだやかなる
光は高梁・倉敷にもあふれます。

岡山県の三天河川は「旭川」「吉井川」「高
梁川」ですが 比庵さんの故郷はその高梁で
すね。

私の故郷倉敷からも近く春の山里は一面の
桃の花、川清く桜並木が美しい酒津へは小学
校の遠足のお決まりの土手でした。

ヒアンさん、比庵さんと母の言葉の中によ
くお名前が出てきました。倉敷は日本で初の
西洋美術館である大原（美）があり、民芸館
考古館と私の興味は「民芸」、そちらに夢中
でしたので「書」の方向に興味を示さず、お
名前だけが記憶に残っておりました。母は書
道・茶道・山野草会と日々を丁寧暮らしと
いうことを実践しており、蘭茶、土筆の菓子
など作ってはお客様にお出ししておりました。
季節を日々楽しみ私達子供にも日々を丁寧
に。この言葉は比庵さんが自分の標語だと
云っておられる「毎日佳境」と同意語かも
と思えます。毎日佳境―歌、書、画の三位
一体の芸術をまどかなる心で築きあげておら
れます。知る程にまどか（円）なるという言葉
葉の似合う方はほかにほおられないのではと
。誰からも好かれる心豊かなお人。作品
のほのぼのとした明るさ、のびやかさは書・
画・歌に魂を致します。和服でいそいそと出
掛けていた母、玉島の圓通寺（良寛さん修業
の寺）、倉敷の安養寺の茶会等その頃に比庵
さんにもお目にかかっていたのかもしれない

ん。

私は昭和五十七年に関東住まいと
なり、絵手紙と出会い、小池邦夫先
生から比庵三芸の素晴らしさを私たちに
理解し易く受継いで伝えて頂きました
。日常の生活を「毎日佳境」その
の気持ち短くひとこと手紙に書い
てポストin。これが絵手紙。今日日本
中世界に手書きの手紙文化が花開い
ています。ある時の勉強会で小池先
生が「富澤さん、浦上玉堂を知って
いるか？比庵さんは？」（エッ！）今
にして思えば岡山出身の文人画家の
名前。何にしてもそうですが、自身
が興味を持たなければ胸の奥にスト
ンと落ちるものではありません。そ
れから比庵さんが身近に感じられる
ように、普段着の絵手紙にのめり込
んで三〇年近く今に至ります。比庵
さんのあの特徴ある字配り、流れる
ような文字は何処から来たのかしら、私には
少し読みにくい万葉仮名、変体仮名の歌。
「上下二千歳、書家各々の門を樹つ、筆は須
らく意に従つて運ぶべし、字は形を以て論
ずる事なかれ、一気龍蛇の形、満箋風雨の痕、
うつくしくして」



秋果

秋風は君が山河へ吹きゆかむ

蕭条としてうつくしくして

比庵九十一



薔薇の花あまた買ひて夢よりも
美しき室にねむ羅無とする 比庵九十二

古今泥む慮なく、妙決自
然に存す。」（比庵だより
より）

先輩が下さったという
この言葉が大変気に入っ
たと言っておられます。
確かに一気に書かれた龍
蛇の形です。また「温顔
にして書く」と書も和ら
かにできる」とも言われ
ます。

歌を生かすために画を
書き書も書く歌人。

「心貧しき者は辛いな
り。」聖書からキリスト
の言葉を歌を詠む上での
歌境としておられた。悲
しみのわかっている者、
寂しさ哀しさを明るく昇
華させておられる歌、悲
しいものであるから却つて之を嬉しう方面か
ら取扱つて悲しさを忍ばせる―楽しげに詠
んでおられる心の根底にお子様、奥様を亡く
された深い深い悲しみが伝わってきます。

秋風は君が山河へふきゆかむ蕭条として
うつくしくして 比庵九十一

歌のなかに何とも云えないリズムと哀しみ
が私には伝わります。書は寂厳、歌は平賀元
義、画は浦上玉堂を目標としていたそうで、
あゝ父が寂厳さん寂厳さん、母は比庵さん比
庵さん。もつともつと聞いておけばよかつ
たと、両親共によき生き方やよき作品を伝え
てくれたのですが、昨年（二〇一六年）
に母も一〇二歳で逝きました。

亡き妻のさとしあれば高梁ゆ
有漢四里みち曼珠沙華のはな 比庵
夏にはキスゲの花、秋には曼珠沙華、花の咲
くのを見る毎に懐しい故郷を想います。

静かな環境の中に木造二階建て、ご家族に
囲まれてのどかな日常を詠われたのがこの
歌であり、「たのしげに家のものがら笑ふ聲」
に九十三歳のしあわせな心が潜んでいる。そ
してこの時代の「こたつ」には、今日の暖房
完備の部屋にはない安らぎと平和があるよう
に思う。昭和五十年（比庵最後の年）の作で
ある。

清水比庵の歌（二）

秋葉 貴子

（「窓日」編集長）

たのしげに家のものがら笑ふ聲
こたつにあたりきげばたのしも

たのしげに家のものがら笑ふ聲
こたつにあたりきげばたのしも
東京豊島区駒込のお住まいには、ご生前
「窓日」の編集会議で何度か伺いましたこと
がある。一階の上ると南側に廊下があり、左
手に和室があり、その部屋は日頃画や書の創
作室として使用されていたようで、いつも畳
の上に大紙が広げられており、硯や墨や筆が
用意されていた。そして右手の突き当りは洋
間となっており、そこで編集会議は開催され
た。

静かな環境の中に木造二階建て、ご家族に
囲まれてのどかな日常を詠われたのがこの
歌であり、「たのしげに家のものがら笑ふ聲」
に九十三歳のしあわせな心が潜んでいる。そ
してこの時代の「こたつ」には、今日の暖房
完備の部屋にはない安らぎと平和があるよう
に思う。昭和五十年（比庵最後の年）の作で
ある。



野菜

たのしげに家のものがら笑ふ聲

こたつにあたりきげばたのしも

比庵九十三

「五会」のついで

相模女子大学教授

柿木原くみ

「出合い」という言葉はいろいろな場面で使われる。人と人やモノとの「出合い」は日常のことである。

筆者が清水比庵と「出合った」のは平成二十六年秋のことだった。谷崎昭男先生より「まどかなる清水比庵 歌と書画の世界」(二玄社版)を頂戴した。清水比庵の名は書道に関する仕事上承知していたが、その人や作品についてゆっくり鑑賞したことはなく、表情が豊かで面白そうな作家とする印象をもっているに過ぎなかった。帰宅途中で「まどかなる清水比庵」に向き合い、略年譜の記述を辿ると、昭和二十二年疎開先から東京都駒込の娘明子夫婦の家に移る、とあった。そして不意に五、六年前に筆者の住所をご覧になったI先生が、「このあたりに清水比庵が住んでおられたんですよ。お嬢さんのご家族と一緒に」と言われたことを思い出した。

比庵旧宅は豊島区駒込六丁目、筆者も二年余前まで同じく駒込六丁目に住居していた。本郷通り六義園から染井霊園に至る一筋を染井通りという。霊園に向かって左側は武家屋敷、右側は植木屋が多く住んでいたという。旧町名は駒込染井町で染井吉野桜発祥の地である。

比庵旧宅を尋ねる前に巣鴨駅前交番に立寄り地図を見せてもらった。清水家は染井通りを右折してすぐのところであり、向いに大正三年創業の芥川製菓駒込工場があった。筆者の住居から百五十米ほどの所であった。I先生から伺った頃なら比庵の娘明子様ご



駒込の清水家 2階が比庵の書斎

健在であったのに、いま清水家は駒込を離られた。比庵は昭和四年に古河電工日光精銅所を退職、翌五年に懇望されて日光町長に就任、十四年に退任した。昭和三十三年第一回日光市名誉市民に推挙された。町長在籍中の昭和八年に歌集「朝明」を發行、十年六月に中禅寺湖畔において「慈悲心鳥を聴く会」を企画、中川與一・幹子、岡本一平・かの子、萩原朔太郎、保田與重郎、長谷川巳之吉、福田清人、若山喜志子、四賀光子ら錚々たる人々が参集した。これらのことは清水比庵の文人としての開花を予期させるに充分だったと思



日光歌会

後列右

3人目より

清水比庵

保田與重郎

岡本一平

萩原朔太郎

中河與一

長谷川巳之吉

前列右より

四賀光子

岡本かの子

若山喜志子

中河幹子

日光明智平

展望台にて

魚といふ新年御題木魚ではどつであらうと大僧正がいはれる

比庵八十五



われる。保田與重郎は「この旅で私は日光町長をしていた清水比庵先生を始めて知ったのである。今の文壇や芸術界で私が最も尊敬している一人はこの翁であると記述している。比庵は昭和三十三年に保田の著書「現代畸人傳」(新潮社)の装幀を引受け、保田は昭和四十七年に「比庵いろは帖」(求龍堂)の巻頭に「比庵先生禮讃文」を書いてる。

さて筆者はその後谷崎先生ご所蔵の比庵の作品一幅(図版)を拜見しその自由自在な筆の線の魅力、構成にみられる感性などにすっかりまいつてしまった。

平成二十七年は比庵没後四十年という節目の年であったので、五月に埼玉の遠山記念館で四十四点、九月に高梁市歴史美術館で四十三点、笠岡市立竹喬美術館で六十三点の他、令孫固(かたし)氏が九月に横浜市菜区民ホールリリスで開催した比庵展で四十四点の作品を鑑賞できたことは思いがけない出合いであり、大きな収穫だった。比庵との出合いからようやく一年、筆者の比庵研究はスタートしたばかりである。

註：本文は筆者が相模女子大学国分研究会々報第41号(平成二十七年十二月)に寄稿したものである。

比庵さんの画賛短歌

今福 啓家

比庵佳境の会会員

今福 啓家

私が比庵さんの画賛短歌の多くが「比庵晴れ」(比庵が九〇歳の時に作成した自選短歌集)に載っていないようにだと思つたのは三十年位前からでした。当時私は比庵ファンになつたばかりで、影響を受けた友人の家は、おやつ時に奥の居間に遊びに行くとお父さんとお母さんと女中さんの三人で、覚えてる比庵短歌をそれぞれ語らざる事を習慣にし、最後に比庵短歌を書いたカードを一枚選び、その歌について勉強していました。時々それに加わりましたが、当時何の本も持っていないので、直前に応接間にあつた比庵百華や野水帖をめくって、画賛短歌の覚えてるを語らざるという具合でした。時にうる覚えで語らざる損ねることもあり、その場にあつた「比庵晴れ」で調べても載っていないということが度々ありました。

平成二十一年竹喬美術館友の会から比庵晴れ・野水帖・比庵作品集・水清きから採録した「清水比庵短歌集」が刊行されました。これを利用して調べてみたら、図録その他の作品(画)の画賛歌の多くが短歌集に載っていないことがわかりました。比庵晴れは一楽書芸院の書家が作品を作るのに引き易い歌集が欲しいという事からできたように聞いておりますので、比庵さんは自分の画賛用の歌は載せなかつたのではと推察します。画賛として短歌作品が残れば歌集に載せなくてもよいと思われたのなら、ずいぶん思ひきつた事だと思えました。いづれにしても流石に画賛短歌は秀歌だと思いますので、歌集に載っていないので知らない人が多くおられるなら残念に思います。

どなたかまとめられて世に出される事を希望します。

「比庵晴れ」に載っていない画賛短歌の例

清水比庵作品集（朝日新聞社）画賛

- ・鯉のほり大青空にひるがへり庭もめでたき花菖蒲かも
- ・山河を遠くはなれてふるさと柿栗にのみおもほゆるかも
- ・ふるさとの人は年老いてよく語りよく喜びぬなつかしきかも
- ・大御代は朝新しく勢ひひて明けわたるらし年新しく
- ・夕ぐれのあかりをしみ縁にいでながめてあればからすかへるも

比庵歌書画（求龍堂）画賛

- ・邪を拂ひ正をたすけて笑ひ顔せねどしたしき不動さまかも
- ・あかときの赤きみ空にさみどりの残月ありてほそくきらめく
- ・家毎に柿の木高くとわわにも実を盛り上げて山河色づく
- ・ふるさとの山に上ればそのむかし上りしままに路のあるかも
- ・白雲の富士の高嶺は天翔る窓の下より麓まで見ゆ

比庵百華 画賛

- ・天地を引裂くごとき大かみなり恐ろしければ落付いてをる
- ・身辺をいろいろ書きて楽しかり終に手紙の宛名を書くも
- ・町庭へはつかに注ぐ夏の日にあざみの花は咲きてあるかも
- ・筍の初ものこれはこれはなほわれに長生きせよとこの上にほのかなるべに美しや青を得てトマトの紅のあなうつくしや

野水帖 画賛

- ・さんらんと金色なせる神宮に霧吹きやまず松の間を漏り
- ・ふるさとの瀬戸の海なるさくら鯛たぐひもあらぬふるさとの鯛
- ・多摩川の白瀬のみゆる山のうへの若葉の間より黒き蝶とぶ
- ・えをとめはえをとこを得つえをとこはえをとめを得つちよに栄えむ
- ・庭畑のたうもろこしの高しげる穂立のうへの夕焼のいろ

清水比庵 毎日歌境 画賛

- ・ひさかたの天の大空くれなぬにわが八十の朝ぼらけなり
- ・富士の山見ゆるとに居る人はあした夕べにたのしかるべし
- ・あしびきの片山みちの鳥の聲竹より松に移り鳴くかも
- ・水清く柳はみどりくねなるに花咲きみちてあれと思ふも
- ・この年も暮れむとするか天地に蕭條として人老いてあるを

清水比庵展のお知らせ

おかげさまで清水比庵の人氣は高く、会報第六号を発行した昨年一〇月以降すでに四回作品展が開かれています。詳細は次のとおりです。

◎ 二十八年十月〜二十九年一月

岡山市吉備路文学館「比庵と玉堂」展
歌を通して親密な交遊のあった玉堂との書簡と合作品展示

◎ 二十九年一月八、九日

横浜市栄区上郷地区センター

比庵コレクターの所蔵作品を多く展示したのと、多くのボランティアの方々の協力があり、二日間で二五〇人の方々が観覧された。

◎ 二十九年一月二十一日〜二十九日

横浜市青葉区墨の美術館「清水比庵展」今回が三回目で、毎年一月に開かれている。

◎ 二十九年二月十五日〜二十五日

東京都品川区大崎ウエストギャラリー「清水比庵展―比庵に学ぶ―」好評なので、今後、ウエストギャラリーでは毎年開催の予定です。

今年前は前記の他、次の開催予定があります。

◎ 四月二十九日（土）〜七月二日（日）

源吉兆庵鎌倉美術館
鎌倉市小町 3-9-1 (0467-23-2788)
開館時間 10:00〜17:00
(入館は16:30まで)

休館日 第一、第三、五、六、九、十一、十三、十五、十七、十九、二十一、二十三、二十五、二十七、二十九、三十一日

入場料 大人六〇〇円、六五歳以上四八〇円、小中学生三〇〇円

アクセス JR鎌倉駅より小町通り徒歩三分

比庵展は二回目、作品の他に若い時代の絵手紙を前期（四月二十九日〜六月四日）に、七〇歳代以降の絵手紙を後期（六月六日〜七月二日）に展示

◎ 九月五日（火）〜十一月五日（日）

源吉兆庵岡山美術館
岡山市北区幸町 7-28 (086-364-1005)

◎ 九月九日（土）〜十月八日（日）

岡山県高梁市歴史美術館
(086-21-0180)

比庵の生まれ故郷の美術館で、しばし

会費納入のお願い

29年度の会費を下記に納入されますようお願いいたします。

一口 1000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義…クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>
事務局：村上 信行
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 4-4-2

◎ 九月十三日（水）〜十一月二十四日（金）
「オーシャンプロムナード湘南」の館内ギャラリー
〒251-0037 藤沢市鵠沼海岸 2-11-17 (0466-30-5251)
10:00〜17:00 年中無休 入場無料
作品と若い時代の絵手紙等を展示



【電車】 小田急江ノ島線「鵠沼海岸駅」から徒歩6分
【自動車】
◎東京方面より約90分/①第三京浜→横浜新道経由にて「玉川IC」から約60分/②首都高3号線大橋JCT→中央環状線C2→横羽線K1→三ツ沢線K2→横浜新道経由にて「大橋JCT」から約90分 ◎横浜方面より約45分/横浜新道→藤沢・江の島方面（国道30号線）「藤沢警察署前」交差点を左方向→市道「鵠沼海岸五丁目」交差点を左折し300m先 ◎鎌倉方面より約25分/国道134号線「鵠沼海岸」交差点を右折し、次の交差点を左折し200m先